

H31地域協働研究（ステージⅠ）

H31-I-13 「IGRいわて銀河鉄道を活用した持続可能な開発目標（SDGs） 教育プログラムの開発」

研究代表者：特定非営利活動法人環境パートナーシップいわて

研究代表者：総合政策学部 山田佳奈

研究チーム員：渋谷晃太郎・泉桂子・宇佐美誠史（総合政策学部）

佐々木明宏（特定非営利活動法人環境パートナーシップいわて）

<要旨>

本研究では、IGRいわて銀河鉄道を活用したSDGs教育プログラムの開発を目指し、文献調査やヒアリング調査等を実施した。この結果、IGR自体が様々なSDGsに貢献する活動を行っていること、IGR沿線にはSDGs関連活動を行っている企業や個人等が多く存在すること、IGRを利用してそうした活動の場に行くことができ、これらの拠点をつなぐことで教育プログラムを組むことができることを明らかにした。

1 研究の概要（背景・目的等）

岩手県では全域で人口減が進んでおり、交流人口の確保が課題となっている。また、IGRいわて銀河鉄道（以下「IGR」）は人口減により利用客が減少し、赤字化、3セク存続困難、地域の疲弊という負のスパイラルに陥る恐れがある。このためには、県外からの利用者や交流人口の確保が必要である。

一方、修学旅行のテーマとして「持続可能な開発目標」（以下、SDGs）が注目されつつある。このことから、IGR沿線の諸活動をあらためて見てみると、二戸市のエコツアーなど環境に関する先進的な取組や、雑穀文化、ウルシ伝統工芸、広葉樹資源の活用、FSC森林認証など、SDGsを推進するための様々な取組が実質的に行われてきたといえる。しかし、多くの場合はSDGsという視点が示される前よりこうした活動が行われていたこと等から、「SDGsに向けた取組」としては発信されにくかったと思われる。

そこで、本研究ではこれらの取組をSDGsの視点から再整理し、SDGsに関心を持つ学校や企業等を対象とした、IGRを活用したSDGs紹介モデルを作成し、県内外からの交流人口を確保することを目的として調査を行った。

また、国が策定した第5次環境基本計画では、日本の方向性の一つとして地域資源を持続可能な形で最大限活用した「地域循環共生圏」を創造し環境で地域を元気にすることが述べられていることから、IGR沿線で「地域循環共生圏」を考えるきっかけ作りも本研究の発展的な目標としている。

2 研究の内容（方法・経過等）

①SDGs活動の抽出

IGR沿線および近隣の市町村で行われているSDGsに関連する活動を文献調査、ヒアリング調査などにより抽出し、SDGsの視点から整理した。

②IGRを活用したSDGs教育プログラムの検討

①で抽出された活動をSDGsコンテンツとして整理し、IGRを使用したSDGs紹介モデルを検討した。

③SDGs紹介モデルの試行及び評価

IGRを使用したSDGs紹介モデルツアーを実施した。

④SDGs紹介モデルの提案

実施結果等に基づきIGRを活用したSDGs紹介モデルの修正を行い、他の分野への拡張などを含め提案を行う。また、当該地域での「地域循環共生圏」の在り方についても提案を行う。

3 これまで得られた研究の成果

①SDGs活動の抽出

上述の方法により、IGRの沿線および近隣地域のSDGsに関連する活動を抽出し、SDGsの視点から整理した。

<ア IGRいわて銀河鉄道のSDGs活動>

鉄道は、輸送機関としてSDGsに多くの貢献をしている。特に、輸送時の一人当たりの二酸化炭素排出量は、マイカーと比較して1/8で済むといわれており、SDGsゴールに大きな貢献をしている。また、JR東日本によるSDGs達成に向けた新たな取組（「プラスチックの削減」他）の表明（JR東日本ニュース：2019年10月8日）など、国内でも鉄道会社によるSDGs活動の明示化が増加している。

こうした状況をふまえて、本研究ではIGRの取組について文献による調査を行うとともに、IGRにヒアリングを実施し、取組状況を確認した（4月26日）。その結果、IGRでは、マイカー利用の削減のために菓子駅と大釜駅で行政と協力しパークアンドライドを実施していること、二次交通の不足を補うためにレンタサイクルを行っていること、また、沿線で行われているSDGs関連活動（例えば「岩手自然エネルギー物語」など）を観光商品として開発し実施していることなどが明らかとなった。

<イ 盛岡市内の企業等のSDGs活動 >

盛岡市内のSDGs活動を行っている企業や施設について、WEBや文献等によりリストアップを行なった。

・盛岡市内ではSDGs活動を標榜している企業や団体が増えてきている。このうち、企業などの団体向けにSDGs活動を見学することができるリコージャパン(株)岩手支社を訪問し、同社の先進的な取組を見学しお話をうかがった（2020年3月6日）。

・盛岡市内には歴史ある定期市が開かれている。代表的なものとして神子田の朝市や材木町の「よ市」がある。これらは全体としてSDGsゴールの一つである「持続可能なまちづくり」に貢献しているといえ、また、出店者自体がSDGs活動を行っていたり、市場で買い物をすることによって市民自体がSDGsに貢献する機会を与えるものとなっている。

・材木町「よ市」でSDGs:「よ市」は盛岡市材木町で1974年から開催され、4月から11月まで毎週土曜午後に開催されている(2019年時点)。店はもともと材木町にある店舗と臨時に出店する店舗があり、地元野菜やパン、地ビール、ワインなど地元の産品が多い。今回は、よ市事務局が作成している地図から出店者リストを作成し、SDGsとの関連性を調査し、「よ市 de SDGs」リストを作成した。

<ウ IGR周辺のSDGs活動調査>

県北のIGR周辺で行われているSDGs活動(環境配慮型農業、企業など)をWEBや文献等によりリストアップした。また、地元の素材を利用した箸作り体験(2020年3月9日)を通して、ツアーコンテンツとしての可能性が見出された。

②IGRを利用したSDGs紹介モデルの検討

①で抽出された活動をSDGsコンテンツとして整理し、IGRを活用したSDGs紹介モデルを検討した。その結果、「盛岡周辺お気軽SDGsツアー」と「IGR一日堪能SDGsツアー」の2つのモデルを作成した。

③SDGs紹介モデルの試行

・「盛岡周辺お気軽SDGsツアー」は、IGRを利用して盛岡市の「よ市 de SDGs」とIGR菓子駅近くの「由井野菜園」を訪れる、土曜日限定の半日ツアーである。

モデルとしては、盛岡駅からIGRで菓子駅に行き、徒歩(10～15分)の由井野菜園で農業や畑の話聞き、野菜を購入、逆コースで盛岡に戻り、木伏緑地を経由して「よ市 de SDGs」を体験するものである。

試行の実施日(11月23日)は、午前中に由井野菜園を訪れ、農業や化学肥料を用いない農業の話などを聞いた。



【写真】由井野菜園での間取り(2019年11月23日)

盛岡周辺には多くの環境配慮型農業者がいるが、情報が得にくく、興味を持っている市民もなかなかアクセスできない状況にある。そのため、

沿線のそうした農業者をIGRが紹介することで、IGRの利用の促進とともに農業者の支援につながると考えられる。

この後、菓子駅に戻り青山駅で下車し、IGR本社においてIGR(びすろ銀河)開発の「熟レ鶏弁当」をいただきながら、同社のSDGs関連活動についてヒアリングを行った。びすろ銀河では、岩手県内、特にIGR沿線の食材を使ったこだわりの食事をとることができることから、コースに加えた。

ヒアリング後に盛岡駅に戻り、木伏緑地の食堂街を経由して材木町「よ市」に向かった。よ市では、事前に作成したSDGs関連店舗の状況を確認した。

・「IGR一日堪能SDGsツアー」の試行では、IGRの「ホリデーフリーきっぷ」(土日祝日限定・IGR全線乗り放題)を最大限活用し、盛岡駅からいわて沼宮内駅、奥中山高原駅、一戸駅、二戸駅周辺のSDGs関連施設を徒歩で廻った(2020年3月14日)。

試行実施時期が3月であったことから、IGRが主要駅に配慮しているレンタサイクルを使うことができなかったが、4月から11月までは、台数が限られるもののレンタサイクルが使用できるため、行動範囲を広げることができる。

・いわて沼宮内駅:駅から少し離れた場所に展開する商店街をめぐり、肉のふがね、街の駅「よりーじゅ」などを訪問。

・奥中山高原駅:奥中山高原農協牛乳工場、そのすぐそばにあるカナン園「小さき群の里」、産直奥中山高原を訪問。

・一戸駅:最も遠方の一戸手技工芸館を目指し、一戸町の地場産業を見学した後、萬代館や途中の平孝商店、岩手ハムの内澤商店などを巡った。

・二戸駅:駅前商店街から市役所方面に向かい、九戸城跡、カナンパン、丹市パン、南部美人、短角亭、JA新しいいわて二戸支所産直、シビックセンターをめぐり二戸市のコミュニティバスを使って二戸駅に戻り、盛岡に戻った。

当日は、土曜日であったことや、新型コロナウイルス対策のための移動自粛などがあり、残念ながらほとんどすべての施設が休業中であった。しかし、レンタサイクル(上述)や二戸市の市内循環コミュニティバスなどを利用することで、機動力を発揮することができる。また、各駅からの2次交通が得られない場合は駅周辺の施設を探索することとなるが、徒歩で楽しみながらSDGs街巡りができることもわかった。

4 今後の具体的な展開

今後の展開としては、IGR自体がSDGsに貢献していることを外部に発することによって、企業のイメージアップにつながると考えられる。また、自治体やSDGs企業等と協力しSDGs地球温暖化防止対策としてパークアンドライド等が一層充実されることによって、各地域の活動との相乗効果が期待できるだろう。

また、IGR沿線でSDGsに貢献している企業や農業者等を紹介することは、市民と企業や農業者をつなぎ、各産業への支援にもつながる。このように、SDGsは関連セクターをつなぐためのツールとして活用することができることから、鉄道という交通手段がもつポテンシャルを活用しつつ、教育プログラムとしてSDGsの理念を積極的に組み入れることで、地域全体および次世代への継承が期待される。

5 その他(参考文献・謝辞等)

調査にご協力いただいた皆様、そしてIGRいわて銀河鉄道濱戸氏には、多忙中にもかかわらずヒアリングに応じていただき、多くの示唆をいただいた。厚く御礼申し上げます。

<参考URL>

環境省HP「環境基本計画」、https://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/(最終閲覧日:2020年7月20日)